雲雀と真紅

神崎真紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雲雀と真紅

【Ｎコード】
Ｎ１６２５Ｑ

【作者名】
神崎真紅

【あらすじ】
家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！の夢小説です。

主役は雲雀恭弥になります。

ヒロインは私神崎真紅が
妄想に浸りながら書きました。

雲雀と真紅（前書き）

舞台は並盛高校設定です。一年生の神崎真紅と風紀委員長の雲雀恭弥の身勝手な作者の妄想夢小説です。

雲雀と真紅

何となく嫌な予感がする…――――

恭弥は応接室の窓から、外を見ていた。

――バタバタ…ドテッ…――

「いったぁ～い。」

…また真紅か。
しかしよく転ぶな。

「恭ちゃ～ん、転んだ～。」

「聞こえてるよ。…怪我したの？」

「膝が痛い～。」

やれやれ…――

「おいで。見せてごらん。」

真紅はソファに座って、スカートを捲りあげた。

真紅の両膝は、無残な擦り傷が出来ていた。

「どうしてそんなに転ぶの？」

傷の手当てをしながら、恭弥は呆れて聞く。

「さぁ～？何でだろ～？」

真紅は首を傾げて考える。

恭弥は呆れて言う。

「真紅は落ち着きが足りないよね？」

――ガーン！！

―はっきり言われた。

そりゃあ…自覚は多少あった…かもだけど…。

「恭ちゃん意地悪ぅ。」

「何？僕に向かっていい度胸だね？」

え…？ち、ちょっと…

恭弥が真紅の身体を抱き締める。

そのまま真紅の唇に触れる。

軟らかい感触…温かい恭弥の体温。

くすっ…

「キスだけでボーっとしてるよ。真紅？」

「うぅ〜。恭ちゃんの意地悪〜。」

いつも僕の仕事の邪魔する罰だよ…――

「恭ちゃん？送ってってくれるんでしょ〜？」

「？何故？」

「だって足痛い～。」

はぁ…――――

やっぱりそう言うと思った。

「僕まだ仕事残ってるけど？誰かのせいで。」

「ふぅ～ん。草壁のせいかぁ。」

いや…それ違うから。

真紅に全く自覚なし。

「仕方ないなぁ。あたしが手伝ってあげるよ。」「いい！」

即答かい？
何で～？

「真紅が手伝うと、仕事ばっかり増やすから。」

がビーン！！

知らなかった……――

「あたしって…恭ちゃんの役に立たないの…？」

「ん？違う意味では必要だよ。」

なんか…意味深なんだけど？

でもあたしが必要って、恭ちゃんが言ってくれたから……――

その日、僕は日課の校内パトロールをしていた。

1年の教室……――真紅の教室か。

ふと覗くと、真紅が楽しそうにクラスの生徒達とおしゃべりしていた。

何人か男子生徒も混じっている。

僕は混沌とした感情に支配されていく……――――

――ガラッ――――

教室中が、水を打った様に静まり返る。

「真紅。おいで。」

僕はただその場から、真紅を連れ去りたかった。

「恭ちゃん??」

「聞こえなかったのかい?僕と一緒においで。」

??真紅には恭弥の言う事が理解出来ない様だった。

僕は真紅の腕を掴んで、教室から出て行く。

「??恭ちゃん?どうしたの?」

「…僕以外の男と群れない約束。」

混沌とした感情の正体は、判ってる。

嫉妬。

そのまま真紅を応接室まで連れて行った。

「相変わらずだなぁ。恭ちゃんは。」

「…悪い？」

僕は真紅に知られたくなかった。
僕の中にある感情を……――

――――学校の屋上。

真紅はひとりぼんやりと金網越しに、空を見ていた。

『シンク』

「ヒバード？恭ちゃんはどうしたの？」

『ヒバリシゴト』

…仕事か。
でも、今は恭弥に会いたくない。

だって……――

真紅の瞳に涙が浮かぶ。

「…浮気者。ばか。」

「ばかって、僕の事？」

えっ？？

ゆっくりと振り返ると、恭弥が立っていた。

「恭ちゃん…。何で…？」

「さっきの見たんだね。」

「……。」

言葉が出ない。

代わりに涙が零れ落ちる。

「真紅？」

恭弥が近付いて来る。

「来ないで…。」
涙声で真紅が言う。
構わず真紅を捕らえる恭弥の腕。
そのまま息が出来ない程の、激しいキス…――――
真紅が振りほどこうともがくが、力で恭弥に敵う訳がない。
「んっ…はっ…」
長い長いキスの後、恭弥が言う。
「僕が愛してるのは真紅だけだよ。」
「嘘…。」
「僕の言う事信じないの？」
「だって恭ちゃんさっきあの人と何してたの…？」
「付き合ってって言われたから、断っただけだよ。」

…本当はキス付きでね。
言わないけどね。

「ヒバード～！恭ちゃんの言ってる事本当？」

『ホントホント』

「ふぅ～ん。じゃあヒバードに免じて信じてあげる。」

…僕の言葉よりヒバードを信じるんだ…真紅は。

「真紅、僕の事疑った罰だよ。今から応接室行くよ。」

えっ？？
嘘でしょ？？

――…恭弥に嘘はなかった。

「ねぇ～、恭ちゃん？」
「何？」

――…真紅は少し考えてから、思い切って切り出した。

「本当はさっき何してたの？」
恭弥はムッとして言う。
「まだ僕の事信じてないの？」「そんなんじゃなくて～。」
「じゃ何？」
うわ……
恭ちゃんかなり怒ってる？
拙いかなぁ…？でも…何だかすっきりしないし。
「本当の事教えてよ？」
「ふぅん。教えてもいいけど、真紅煩いだろ？」
何それ～？
やっぱり何かあるんだ。
「煩く言わないから。」
「仕方ないな。さっき付き合ってくれって言われて、断ったって言っただろう？」
「うん…。」
何となく嫌な予感。
「断る代わりにキスしてくれって言われた。」

――ドクン！

真紅の心臓が早鐘のように打ち出す。

「まさか恭ちゃん…？」

「あんまり煩いからね。」

「…やっぱり浮気者だよ恭ちゃんは…。」

そのまま応接室を飛び出して行った。

…だから聞かない方がいいって言ったのに。

今夜はたっぷり愛してあげるよ。真紅…――――

覚醒しておきなよ。

僕に逆らう事は例え真紅でも許さないからね。

応接室の窓に夕日が反射している。

「真紅。帰ろう。」

恭弥は手早く帰り仕度を始めた。

「・・・あたし今日ひとりで帰る。」

「それは許さないよ、真紅。」

今夜はいっぱい鳴かせてあげるんだからね。

半ば強引に、恭弥に連れられて帰路につく。

ーーーーー・・・真紅の家の前を通り越しても、恭弥は真紅の手を掴んだまんま離そうとしない。

「???恭ちゃん??あたしの家通り過ぎちゃったよ?」

「真紅は今日は僕の家に泊まり。」

「えっ？」

「僕の事浮気者って言った罰だよ。今日は帰さないよ。」

恭ちゃん・・・恐いんだけど・・・ーーーーー

「いっぱい愛してあげるよ、真紅。」

耳元で囁かれて、足元から崩れ落ちそうになる。

くすっ・・・ーーー

「もう感じちゃったの？」

「・・・知らない。」

そのままふたりで恭弥の部屋へ。

「僕の可愛い真紅・・・。」

キスされたままベッドに倒される。

「んん・・・・。」

「相変わらずいい声・・・。」

恭弥にその身を任せたまま、真紅の脳裏には別の光景が広がっていた。

どんなに自分を愛してると言ってくれても、真紅からすれば恭弥の行動は理解出来ない。

今・・・優しく自分に触れているこの唇は、あたしだけのものじゃないの？

自然に涙が零れていた。

「真紅？どうして泣くの？」

「・・・・・・・・・。」

答えは返って来ない。

「真紅・・・僕の声聞こえないの？」

「・・・聞こえてるよ・・・。」

真紅が涙声で力なく言う。

「ただ・・・恭ちゃんは、あたしだけの恭ちゃんではいてくれないんだな・・・って。」

「何故？僕は真紅だけを愛してるのに？」

真紅の瞳から零れ落ちる涙・・・。

「だって・・・恭ちゃんは平気であたし以外の娘にも、おんなじ事するんでしょ・・・？」

ーーーーー・・・まだ機嫌直ってなかったんだ。

さて、どうしようか？？

このお姫様は一旦機嫌を損ねるとなかなか直らないからなぁ。

「ねぇ、真紅？」

「・・・・・何？」

この僕に向かって物凄い不機嫌な返事。

真紅じゃなかったらとっくの昔に咬み殺してるよ。

「僕の恋人は真紅ただひとり・・・って判ってるよね？」

「・・・判んない。」

ーーーーー・・・まだむくれてるよ、このお姫様は。

「あっそう。じゃあその身体に教えてあげるよ。」

「えっ・・・だ・・め・・・ぇ。」

一足遅かった。

恭弥は半ば乱暴に、真紅の服を剥ぎ取り、そのまま真紅の中へ・・・・。

「はっ・・・やだ・・ぁ。」

「ふぅん。抵抗出来るならやってごらん？もう力が入らないくせに。」

悔しいけど、こうなっては女は弱い。

「は・・・ぁ・・。」

力が抜け・・・ていく。

「気持ちいいんだろう？」

「ば・・・か・・ぁ。」

「はっ・・・あっ・・・。」

荒い息の中でも恭弥の動きは止まらない。

「真紅。僕が好きかい？」

「き・・・らい・・・あぁ・・・。」

「まだそんな事言うんだ。」

恭弥は一層激しく真紅を責める。

「あっ・・・だっ・・・めぇ・・・。」

ーーーーー・・・・

そのまま真紅は気が遠くなるのを感じていた・・・ーーーーーー

「・・・んく？真紅？大丈夫かい？」

「恭ちゃん？？あたし？？」

くすっ・・・

恭弥が意味深な笑みを浮かべる。

「相変わらず真紅は感度がいいね。」

「ぶっ・・・何それ～??」

「何って、また失神しただろ?」

失神・・・??
また??

真紅にはただ記憶が飛んでるだけにしか・・・。

ただ・・・
物凄く気持ちよかったことだけは覚えてるけど。

「恭ちゃん?あたし前にも失神した事あるの?」

「ふぅん。覚えてないんだ。僕の腕の中で何度もイって、最後は失神しちゃうんだよ。」

・・・サラッと言われちゃったけど、真紅は名前のまんま真紅に染まっていた。

「きょ・・・恭ちゃんのえっちぃ～。」

「ふぅん。そんな事言うとまたしちゃうよ??」

「えっ・・・だ、だめぇ～・・・・。」

抵抗空しく真紅の両腕は、頭の上で恭弥に捕まれた。
そのまま――――――・・・
長い長いキス・・・――――――

「ん・・・はっ・・・・。」

息が・・・続かない・・・・。
恭弥はそんな真紅を見て、言った。

「判ったかい?僕は真紅だけを愛してる。」

「・・・・・知らない。」

「ふぅん。でもどんなに強がっても、真紅は僕なしでは生きられないよ。」

――――――・・・漠然と感じていた。
あたしは恭ちゃんなしでは生きていけないって。
認めるのがただ、悔しかった・・・。

「・・・もう、浮気しない??」

「しないよ。」

ーーーーーー・・・多分ね??

妖しい微笑みで、恭弥が答える。

「じゃ、指きり、して?」

ふたりの小指を絡める。

「これで満足かい?僕のお姫様?」

「う〜。仕方ないから、信じてあげる。」

ーーーーー・・・くすっ。

甘いな。真紅。

僕はそんなに簡単にはいかないよ。

ーーーーーー・・・いつもの応接室。

恭弥は風紀委員の仕事をしていた。

「委員長、今日の書類です。」

副委員長の草壁が、分厚い書類の束を持って来た。

「・・・それからこれ、いつものです。」

恭弥に渡したのは、可愛い封筒の束。

「またか・・・。飽きないな。」

恭弥は興味なさそうに、その手紙の束を机の引出しに、無造作に放り込んだ。

ふぅ・・・ーーーーーーーー

外の空気が吸いたい。

恭弥は屋上へ上がって行った。

給水タンクの上は、恭弥だけの場所だ。真紅以外はここには来ない。

「ふぁ〜ぁ〜ぁ・・・。」

少し眠ろう・・・。

恭弥が目を閉じた時。

「あの・・・。」

・・・女の子の声。
真紅じゃない。
面倒くさそうに目を開けて、声の主を見る。

「何？」

昼寝の邪魔をされて、物凄く不機嫌に聞く。
その娘は、おどおどしながらも、恭弥に話しかける。

「あの・・・手紙読んで頂けました？」

またか・・・・。

「読まないよ。何か用？」

こんな所を真紅に見られたら、また面倒なことになる。

「私・・・雲雀さんが好きです。」

「ふぅん。」

恭弥は、全く相手にする気がない。

「あの・・・雲雀さんは神崎さんと付き合ってるって聞きました。」

「知ってるのに告白かい？目的は何？」

恭弥の目がきらりと光った。

「私と付き合って下さい。」

「駄目。」

そう言ってから、恭弥はその娘の腕を引き寄せ軽く唇にキスをした。

「・・・真紅に言ったら、君を咬み殺す。」

ーーーーーーーーーー真紅に言ったら咬み殺す。

「雲雀さん・・・あの・・・・。」

「キスの事かい？口止め料。して欲しかったんだろ？」

「あの・・・。それはどういう・・・？」

「僕が君を彼女にすると思った？残念だね。」

ーーーーー・・・冷酷無比・・・それが雲雀恭弥だ。

「昼寝の邪魔だから、消えてよ。」

彼女は涙を浮かべて、屋上を後にした。

ーーーーーー・・・その頃、真紅は応接室に来ていた。

「恭ちゃ～ん？」

・・・いないの？？

真紅は恭弥の机に座って待っていたが、ふと引出しからはみ出していた封筒の束が目に入った。

「？何？これ？」

全部女の子からの手紙。
中身は想像がついた。

「草壁～！恭ちゃん何処～？」

草壁が飛んで来た。

「真紅さん・・・。委員長は屋上へ。」

「あっそう。ヒバードおいで。」

ヒバードは、真紅の頭の上に乗った。

『ヒバリヒバリ』

真紅は屋上への階段を、駆け上った・・・――――――

ーーーーーーーーバタン！！ーーーーーーーー
屋上のドアを、勢いよく開けた真紅。
そこで見たものは・・・？
涙を浮かべている女の子・・・と恭弥。
ーーーーーーー・・・拙い！
恭弥は咄嗟に真紅を呼んだ。

「真紅。ここへおいで。」
「恭ちゃん？これは何？」
手紙の束を見せて言う。

「あぁ。ゴミだよ？」

「・・・ラブレターじゃないの？」

「僕は読んでないけど？」

「じゃ、じゃあこの人はどうして恭ちゃんと一緒に此処にいて、泣いてるの？」

・・・だから早く消えてって言ったんだよ。

邪魔だから。

「君、もう行きなよ。判ったろう？」

「はい・・・。」

彼女は泣きながら視界から消えて行った。

「恭ちゃん？説明してくれるのかな？」

「何をだい？」

あくまでも白を切る恭弥。

「あっそう。恭ちゃんのばかぁ～！！」

走って行こうとした真紅を、恭弥の手が掴んだ。
そのまま恭弥の腕の中。

「僕のこと、ばか、って言ったよね？」

「だって、恭ちゃん嘘ばっかり・・・。」

あ～ぁ。

泣いちゃった。

真紅を泣かせるのは、ベッドの上だけで充分なのに。

「真紅？僕は真紅と約束しただろ？」

「・・・・・・・・。」

「約束は破ってないよ。」

「でも・・・恭ちゃん・・・何にも答えてくれないもん。」

「ふぅん。そう・・・。」

恭弥の腕の中にいた真紅に・・・ーーーーーーーー

「恭・・・ちゃん？」

ふふっ・・・

「捕まえたよ？僕から逃げられるかい？」

屋上の金網まで追い込まれ、逃げ場を失った真紅。

『ヒバリダメ』

真紅の頭の上で、ヒバードが鳴く。

「ふぅん？ヒバードはいつから真紅の味方になったんだい？」

「ヒバードはあたしに嘘つかないもん。」

「僕がいつ嘘をついたんだい？」

ーーーーーーーーー迫り来る恭弥。

・・・うぁ。

怒ってる？

「ここで押し倒してあげようか？真紅？」

・・・やっぱり怒ってるよ～。

しかも物凄く～。

「恭・・・ちゃん？嘘・・・だよね？」

金網に押し付けたままで、恭弥の唇が、真紅を捕える。

「ん・・・ふっ・・・。」

さっきの娘にした触れるだけのキスとは、まるで違う激しさ・・・

ーーーーーー

「やっ・・・・・。」

ふふっ・・・。

可愛いね。真紅。

本当にこのまま押し倒したくなってきたよ。

・・・学校じゃ拙いけどね。

また今夜も鳴かせてあげようかな・・・ーーーーーーーー

「恭ちゃん、そうやって誤魔化すの狡いよ。」

おや・・・。

珍しいね。

真紅が僕に言い返したよ。

「ふぅん？で、真紅は何が知りたいの？僕に逆らってまで。」

う・・・ーーーーーーー

言葉に詰まる。

「だから・・・恭ちゃんがあたしに隠してる事だよ。」

「僕が何を隠してるって？」

ーーーーーーー・・・恭弥が真紅に詰め寄る。

怒ってる・・・？

本気で怒ってる・・・？

何で恭ちゃんが怒るの？？？

怒ってるのはあたしの筈なんだけど・・・？

恭弥の気迫に圧された。

「じゃぁ、さっきの人と何してたの？屋上で二人きりで。」

それでも真紅が反撃に出た。

「何もしてないって、何回言わせるの？」

「何もしてないのに、普通泣くかなぁ？？」

「付き合ってくれって、言われて断ったら泣いたんだよ。」

「ふぅん・・・ーーーーー。」

納得いかない真紅。

「もういい。恭ちゃん嘘ばっかり。」

ーーーーーバタン！！

来た時と同じ勢いで、真紅が屋上を降りて行く。

やれやれ・・・ーーーーー

恭弥はゆっくりと真紅の後を追う。

真紅は、裏庭の桜の木の下で、掴んでいた手紙の束に気が付いた。

「これ・・・。どうしよう??」

まさか勝手に読むのは、さすがに気が引けるし・・・。

でも・・・ーーーーーー

気になるのは、確かだし・・・。

「真紅。」

その時、背後から抱き締められた。

「恭ちゃん。放してよ。あたし・・・。」

言いかけた言葉は、恭弥に遮られた。

「ん・・・や・・・め・・・。」

無理矢理恭弥の腕から逃れる。

「真紅。そのゴミがそんなに気になる??」

「・・・・・・・。」

「真紅の好きにしていいよ。」

「え・・・??読んでもいいの??」

「僕はいらないからね。構わないよ。」

それで真紅の機嫌が治るなら、安いものさ。

ーーーーー・・・読んでもいい。

そう恭弥に言われて、躊躇った。

恐い・・・ーーーーーー

「さて・・・僕は仕事に戻るけど?」

「あたしも行く。」だって・・・ーーーーー

やっぱり傍にいたい。

喧嘩しても。

ーーーーーーーー・・・応接室。

恭弥の机には、分厚い書類の山。

早速恭弥は、仕事に取りかかった。真紅は・・・ーーーーーーー

ソファに座って、先程から手紙の束と睨めっこしている。

恭弥はその様子を、横目で見ながら笑いを堪えていた。

「あ～。恭ちゃん今笑ってたでしょ～??」

「別に・・・。」

本当はそれだけ言うのが、精一杯だ。

くすっ・・・。

「あ～。やっぱり笑ったぁ～。」

「いや・・・真紅があんまり深刻なんで、可笑しくって。」

「深刻だもん。」

「ふぅん。そう。」

そして意を決した真紅が、手紙の束に手を伸ばす。
一通目を開封して可愛い便箋に視線を落とす。・・・その可愛い便箋一杯に、恭弥への想いが綴られていた。
何故？？？
みんなが恐れる雲雀恭弥が、こんなにももてるの・・・？？
何通目かの手紙を、読んだ時、真紅の顔色が変わった。
「・・・どうしたの？何が書いてあったの？」
恭弥が真紅の手にあった手紙を読む。
そこには・・・ーーーーーー
紛れもない恭弥との、関係が綴られていた。
「・・・恭ちゃん？？これ、何て言い訳するのかな？」
拙いな・・・ーーーーーー
まさか、そんな事書く奴がいるとは・・・。

「僕は知らないけど？」

もうこうなったら、とことん白を切り通そう。

「ふぅん。じゃああたしこの人と話してもいいよね？」

「それは駄目。」

駄目に決まってるだろう。ややこしくなるだけだ。

「・・・僕が話すよ。それでいいだろ？」

「あたしも一緒に行く。それならいいよ？」

ワォ！

さすがの雲雀恭弥も詰まったな。

窮地に堕ちたかな？

・・・なんてね。

この雲雀恭弥にそんな事ある筈ないだろ？

「どうして真紅が一緒に来るの？」

「だって・・・この手紙・・・本当の事なのか、あたしには知る権利があると思うけど？」

真紅の立場だったら、そう思うだろうな。
逆の立場だったら、もちろん相手は生かしておかない。

「ふぅん。真紅はそんなに僕が信じられないんだね？」

・・・こうなったら、何としても真実を知られないように、阻止するか。

「それで？この手紙に書いてある事が、嘘だったら真紅はどうするんだい？」

「えっっ？？何それ～？？」

「僕をそこまで疑った代償は？何で償うんだい？」

ふふ・・・

こう言われたら、真紅も引き下がるだろ。

「その身体で払って貰うよ。」

「恭ちゃんそれ・・・言ってる事訳判んない??」

「何故?僕は真紅に疑われて、傷ついたんだよ。償うのは当然でしょ?」

うぅ〜・・・ーーーーーー

余計に怪しい。

えぇぃ!

こうなったら一か八か。

女は度胸だよ。

「いいよ。恭ちゃんの好きにしても。だから一緒に行ってもいいよね?」

・・・参ったな。仕方ないか。

「判ったよ。真紅がそこまで言うんなら、来てもいいよ。授業が終わってからね。」

ーーーーー・・・時間を稼いで、あの娘に口止めしとかなきゃ。

ふふ・・・。

これで今夜真紅は僕の思い通りに出来る。

甘いな。

真紅。

真実の雲雀恭弥を知らないのは、真紅、お前だけだよ。

「次の授業が終わるまで、あと15分だよ。恭ちゃん。」

次の授業・・・??

!!そうか。

真紅は、次の授業の合間に行くつもりだったのか。

「僕倉庫で資料を探して来るよ。」ーーーーー・・・内心ヒヤヒヤしながら、僕は応接室から脱出した。

資料室に入り、慌てて携帯を取り出し、電話を掛ける。

「雲雀恭弥だけど。」

相手が、電話の向こうで戸惑ってるのが判る。

「君に命令する。真紅にあの事を話すな。判ったね？」

「神崎さんですか・・・。」

「もし、僕に逆らったら、君を咬み殺す。」

「はい・・・。判りました。」

冷酷な恭弥の素顔が見えた瞬間だった。

「恭ちゃ～ん？？」

真紅だ。

恭弥は慌てて書類を探すふりをする。

「恭ちゃん。時間だよ。」

「そう。じゃ、行こうか。」

ーーーーーー・・・恭弥は心の中で笑っていた。

「恭ちゃん??何だか楽しそうだね??」

「だって、今日は真紅は僕の言う事何でも聞いてくれるんだろ?」

妖しい微笑みを浮かべながら、恭弥が答える。

「・・・まだ決まってないもん。」

そう・・・。
まだ聞いてない。
本当の事を・・・ーーーーー

「ここだよ。」

そこはーーーーーー
1年のクラス。
あたしと同級生??

ーーーーーーーガラッ！！ーーーーーーーー
恭弥がドアを開けた瞬間、教室内が静まり返った。

「高橋亜津子、話がある。」

ザワッ！！
一瞬騒然となる教室。

「・・・何故高橋さんが、雲雀先輩に呼ばれたの？神崎さんも一緒にいるけど？」

みんな口々に、恭弥に聞こえない様に小声で話している。

「はい・・・。」

ソフトボール部の子だ。
真紅は思いだした。
真紅とは対照的に日焼けした顔。
短い髪。

「恭ちゃん。あたしが聞いてもいいよね？」

「構わないよ。」

真紅は手紙を差出し、こう言った。

「この手紙に書いてある事は、本当なの？」

「・・・・・・・・。」

??何故黙っている??

恭弥は苛ついてその娘に問いかける。

「君。答えは？」

「も～。恭ちゃんが聞いちゃ駄目だよ。恐がってるじゃん。」

「・・・本当です。」

本当です・・・??

話が違うだろ??

「恭ちゃん?本当の事なんだってね??何て説明するのかな??」

「君。この僕に嘘をつく気かい?」

「・・・嘘じゃありません。」

「ふぅ〜ん。そう・・・。」

真紅は何かを考えていたが・・・ーーーーーーーーーー

ドン!!

恭弥を突き飛ばして、走り去った。

「神崎さんが・・・。」

「あの雲雀先輩を・・・。」

教室の中は、騒然としていた。

「高橋。僕の話通じなかったみたいだね。」

「・・・・・・・。」

「後で委員会に処分して貰う。覚悟するんだね。」

冷ややかにそれだけ言うと、恭弥は真紅の後を追った。
何という誤算・・・。
考えもしなかった結末に、恭弥は戸惑った。

真紅は応接室には戻らずに、教室に戻って行った。

自分の席・・・。
何だか久し振りだな。

「あれ？神崎さん？珍しいね。」

そう声を掛けて来たのは、沢田綱吉だった。

「沢田君・・・。」

言いかけて不意に涙が零れ落ちる。

「ちょ、ちょっと神崎さん？どうしたの？」

「１０代目。何かあったんすか？」

「よっ。ツナ。どうした？」

「獄寺君に山本。神崎さんが泣いちゃった・・・。」

「神崎。１０代目を困らせるんじゃねぇ。」

「まぁまぁ、獄寺。神崎どうしたんだ？」

真紅は、そのまま泣き出した。

「えぇぇぇ～。ちょ、ちょっと泣かないでよ。」

困り果てた沢田が真紅に触れようとしたその時。

ーーーーーーガラッ！

「真紅に触れるな。沢田綱吉。」

「ひぃ～・・・。ヒ、ヒバリさん・・・。」

「てんめぇ～。今日こそ仕留めてやる。」

「よっ！ヒバリ。久し振りだな。」

「僕は君達を相手にしてる程暇じゃない。真紅、おいで。」

「・・・いや。」

嫌がる真紅を、半ば強引に連れて行こうとする恭弥。

「いや・・・。恭ちゃん・・・放して・・・。」

泣きながら恭弥の腕を振りほどこうとする。

その様子を見ていた3人・・・。

「ヒバリ、嫌がってんだろ？放せよ。」

「・・・何？君、咬み殺されたいの？」

獄寺に向かって、トンファーを構える。

「上等だぜ。相手になってやる。」

「や、やめなよ。獄寺君もヒバリさんも。」

「あれ？神崎いないぜ？」

山本が言う。

真紅は・・・ーーーーーーー

騒ぎに乗じて教室から外へ抜け出して行った。

慌てて真紅の後を追う恭弥。

丁度校門から、歩道へ出て行こうとしている真紅を見つけた。

「真紅ーーーーー。」

恭弥の声に、反射的に車道へ飛び出した真紅の目に映ったものは・・・ーーーーーーー

そして、恭弥が見たものは？？？

真紅の目に映ったのは・・・ーーーーーー

迫り来る1台の車。

そして・・・

キキーーーーーーーーーーッ！！

ドン！！

という鈍い音と共に恭弥の目に映し出された光景は・・・ーーーーーーー

宙を舞う真紅の姿。

スローモーションの様に落下してゆく。

「し・・・んく？」

恭弥には目の前の出来事が、信じられなかった。

「真紅！」

我に返って真紅に走り寄る。

真紅は、頭と口から血を流して、ぐったりしている。

「真紅・・・？」

恭弥の問いかけにも反応がない。

・・・意識がない。

「君。早く救急車を。」

その運転手は呆然としていたが、はっとして携帯を取り出し、震える声で１１９番通報した。

ーーーーーーピーポーピーポー・・・

ーーーーーーサイレンの音が近づく。

学校内は、騒然としていた。

「・・・何？どうしたの？」

「・・・誰か轢かれたってよ。」

真紅と一緒に救急車に乗り込む恭弥。

「真紅・・・？」

救急車の中でも、恭弥は真紅を呼び続けた。

真紅の腕に器具が取り付けられる。

血圧、脈拍、体温・・・全て低下。

危険な状態だと、救急隊員から宣告された。

危険・・・？？

真紅が？？

「嘘だろ・・・？」

真紅は、救命救急センターに搬送された。

緊急手術を受け、何とか一命は取り留めた。

が、しかし・・・医師は恭弥にこう告げた。

「命は取り留めました。しかし・・・このまま意識が戻るかは、何とも言えません。」

真紅が目覚めない・・・？？？

「真紅・・・。」

ＩＣＵで眠る真紅の身体には、真っ白な包帯が幾つも巻かれ、点滴が刺さっていた。

その頃。

真紅の意識は深い闇に沈んでいた・・・ーーーーー

恭ちゃん・・・??

どうして浮気ばっかりするの・・・??

あの娘とはどうなったの・・・?

あたしは恭ちゃんの何?

眠っている真紅の目から、涙が零れ落ちていく。

「真紅??何故泣くの??僕の声が聞こえないのかい?」

意識のない真紅に語り続ける恭弥。

「目を覚ましてよ・・・。」

真紅は眠り続けた・・・ーーーーーーー

あれから1週間、真紅は眠り続けた。

真紅はずっと夢を見ていた・・・ーーーーーー

暗い意識の中で、誰かが名前を呼んでいる。

「クフフ・・・これは神崎真紅さん。」

それは・・・忘れもしない恭弥に傷を負わせた、ただひとりの男。

「六道・・・骸??」

「あなたには雲雀恭弥の声が聞こえませんか?」

「恭ちゃんの・・・?」

「彼が待っていますよ。彼の元にお帰りなさい。」

それだけを言うと骸は消えた。

ーーーーーーピクッ！ーーーーーーー

真紅の手が、微かに動いた。

「真紅？真紅？」

恭弥が真紅の手を掴んで呼びかける。

「きょ・・・・。」

声が出ない。

身体が動かない。

あたし・・・？？

どうしたの？？

「真紅。気が付いたんだね。」

「あた・・・・。」

声が出ない。

「今はしゃべっちゃ駄目だよ。車に轢かれたんだ。」

車に・・・??

そういえばあの時車道に飛び出して・・・。

あの時あたしは・・・ーーーーーー

「真紅・・・よかった・・・。」

恭弥の目に光るのは・・・涙??

恭ちゃんが?

泣いてるの?

「きょ・・ちゃ・・。」

身体が動かない。

話すことさえままならない。

わずか1週間意識がなかっただけで、人はこんなにも脆くなってしまうのか。

「真紅・・・。」

そっと触れる恭弥の唇。

しかし、真紅にはその感触はおろか、恭弥の温もりすら感じられなかった。

「わか・・な・・。」

真紅の異常に気付いた恭弥が、ナースコールを押した。

「はい。どうしましたか？」

「真紅が気が付いたけど、様子がおかしい。」

バタバタとＩＣＵに入ってくる数人の医師とナース。

「これは・・・顔面の神経が損傷してますね。」

「神経・・・？」

医師が真紅の顔に触れる。

「感じますか？」

「い・・・え・・・。」

「先生。真紅はまだ話す事も出来ない。治るんですか？」

「身体については、リハビリが必要です。神経の損傷は、半年で戻らなければそのまま戻ることはないでしょう。」

そう言って、医師達は戻っていった。

「きょ・・ちゃ・・・。」

真紅が事故に遭ってから、既に1ヵ月が過ぎていた。
一般病棟に移った真紅だが・・・ーーーーーー

「きょう・・ちゃ・・・ん。」

「なんだい？」

相変わらず上手く話せないままだった。

「リハ・・ビリ・・いや・・・。」

「駄目だよ。真紅。それは僕が許す訳ないだろ？」

むぅ～・・・ーーーーーーー

「きょう・・ちゃん・・ばか・・。」

はいはい。
何とでも好きに言っていいよ。
君が目覚めない・・・って知らされたあの絶望の日。
あの日の事を思えば、可愛いものだよ。
真紅は僕の傍に戻ってきたんだから。

「そ・・だ・・。」

「どうしたの？」

「ゆめ・・・む・・くろ・・が・・。」

むくろ？？
！あの六道骸の事か！！
あいつなら真紅の精神世界にも入れるのだろう。

「骸と話したの？」

「ん・・きょう・・ちゃ・・まって・・・・。」

あの骸が？？
真紅を呼び覚ましたと言うのか？

・・・有り得ない。
僕はあいつにでっかい借りがある。

「真紅？六道骸が僕の処に戻れ。そう言ったんだね？」

「ん・・・・。」

あり得ないな。
あいつ何を企んでいる？

また真紅を、僕から攫うつもりなのか・・・？

「真紅。そろそろリハビリの時間だよ。」

今はとにかく真紅の身体を戻さなくちゃ。

「う～・・・。」

「唸っても駄目。行くよ。」

「きょう・・ちゃ・・いじ・・わ・・。」

「何言ってるの。一生そのままでいいの？」

冗談じゃない。僕の都合だってあるんだからね？？
真紅が自力で動けるようにならなけりゃ、真紅を抱く事も出来ない。

「きょう・・ちゃ・ん・・の・せい・・。」

「判ってるよ。僕が浮気したから、って言いたいんだろう？」

「ふん・・・。」

「じゃあ、余計僕には責任があるからね。言う事聞いて貰うよ。」

車椅子に真紅を乗せ、病室を出て、理学療法室に向かう。

真紅が歩く練習をしている間に、恭弥はある人物に電話を掛けていた。

「もしもし。」

「やぁ！雲雀恭弥だけど。」

「ヒ、ヒバリさん？どうしたんですか？」

「沢田綱吉。君、六道骸が何処にいるか、知っているかい？」

「六道骸・・・ですか？さぁ？？」

全く。使えないね君って。

「そう。じゃいいよ。」

「あっ！ヒバリさん？」

「何？」

「神崎さんの具合、どうですか？」

「・・・君には関係のない事だよ。」

電話を切って、真紅の元に戻って行く。

「きょう・・ちゃ・ん？どこ・・いって・・た・？」

「ちょっとね。で、練習は進んだのかい？」

「あん・ま・・り・。」

疲れたのだろう。元気がない。

「そう。じゃあ今日はやめようか。」

車椅子に乗った真紅を見る度、恭弥の胸が焼けつく。

「きょう・・ちゃん・・？」

真紅の言葉は少しずつ回復している。

「どうしたの？」

病室でふたりきり・・・・ーーーーーー

「あの・・人は・・？」

うっっ・・・・。

その話か。すっかり忘れてたよ。

「僕の負けだよ。真紅は僕にどうして欲しいの？」

「やくそく・・して・？」

「いいよ。何の約束だい？」

「うわき・・しない・・・。」

また難しい事を言ってくれるよ。僕のお姫様は。

「いいよ。約束するよ。」

「ほんとう・・・？」

流石に信用失くしたかな。

「本当だよ。今回の事故で僕がどれだけ後悔したか、判るかい？」

「さぁ・・・？？」

「真紅の意識が戻らないって、聞かされた時僕がどれだけ・・・。」

恭弥の言葉が止まった。
その瞳に・・・涙？？
恭ちゃんが？？
泣いてるの？？

「あたしには・・・きょうちゃんだけ・・。」

慰めるように真紅は言った。

「真紅・・・。」

そっと触れあう唇・・・ーーーーーー

「ん・・・っ・・・。」

その甘い声。何もかも懐かしい・・・。

しかし・・・。

気に入らないのは、僕より先に真紅と話していた六道骸。

一体奴は何処に・・・？？

・・・ーーーーーー時間は確実に過ぎて行き、真紅が入院してもう2ヵ月が過ぎようとしていた。

真紅の言葉はすっかり元に戻って、普通に話せるまでに回復していた。

が、顔面の麻痺はまだ残っていた。

神経を損傷した事により、痛覚等の触覚と、痺れによる麻痺症状が一部残っていた。

それでも、生活に支障がないまでに回復できたのは、真紅がまだ16歳だった事と、恭弥が支え続けたからだろう。

「恭ちゃん。」

もう、杖だけで歩ける。

「真紅？何処行ってたんだい？」

「へへ・・・。散歩。」

「散歩？ひとりで行っちゃ危ないだろ？」

恭弥に言われると、真紅は照れながら小さな可愛い箱を差し出した。

「今日、何の日だ～？」

今日？？

そうか！！

バレンタインデーか！

「僕にこれを買うために？」

「うん。びっくりさせようと思って。」

「真紅、ありがとう。」

真紅・・・。
僕はチョコレートより君が食べたい。

「恭ちゃん、お医者様がね？そろそろ退院の話をしましょうって。」

「本当かい？」

「うん。さっき廊下ですれ違った時言ってたよ。」

退院・・・ーーーーー
恭弥の胸に一抹の不安がよぎる。
委員会総出で奴を探したが、手がかりすら掴めなかった。
六道骸・・・。
一体何処にいるのか？
そして・・・ーーーーーー
何を企んでいるのか？

「恭ちゃん？どうしたの？」

「あぁ。何でもないよ。」

「あ～。また何か隠してる～。」

「別に隠してるわけじゃないよ。判らないんだ。」

「??何が??」

「・・・六道骸の事さ。」

骸・・・。

そう言えばあの時。

暗い闇の中で聞こえてきた彼の声。

その声に導かれるようにしてあたしは・・・———

気が付いた時には、恭ちゃんがあたしを呼んでいたっけ。

もし、骸に言われなければ、あたしは多分まだ闇の中を彷徨ったまま

まだった。

あたしを助けてくれたのかな・・・??

『クフフ・・・僕は貴女の中にいますよ。』

え・・・??

今聞こえたのは・・・??

「恭ちゃん?今何か言った?」

「ん?僕は何も言ってないよ。」

「えっ??それじゃ・・・・。」

『クフフ・・・・。僕の声は貴女にしか聞こえませんよ。』

六道・・・骸?

「恭ちゃん・・・あたしの中に・・・・。」

「何?真紅?何があったの?」

「六道骸が・・・・いる。」

何だって??

まさか・・・真紅に憑依していたのか・・・・?

「六道骸。聞こえてるんだろう?出て来なよ。」

・・・ーーーーーーこれは・・・霧??

「クフフ・・・・。お久しぶりです。雲雀恭弥。」

「君。ふざけてるの？真紅に憑依するなんて、そんなに咬み殺して欲しいの？」

トンファーを構える。

「おや？いいんですか？僕を殺せば、大切な恋人も死にますよ。」

「・・・何だって？」

「僕は今、彼女の身体に憑依しています。僕を傷つければ、彼女にダメージがいきます。」

真紅・・・。

「六道骸。僕にそんな脅しが通用すると思うのかい？」

恭弥は、既に戦闘体制だ。

「クフフ・・・。やはり君とは、戦うしかない様ですね。」

「・・・来なよ。」

「おっと、ここでは拙いです。場所を移しましょう。」

「その前に、真紅の中から出なよ。」

「クフフ・・・。そんなに大切ですか。」

「・・・君にだってクロームがいるだろう？」

「・・・判りました。それでは・・・。」

・・・――――深い霧・・・。

その中から現れたのは、骸の実体化。

「何処でやるの？」

「そうですね・・・。屋上はどうでしょう？」

「僕は構わないよ。」

その時。

「恭ちゃん、止めて。」

真紅が言った。

「あたしは・・・この人に助けて貰ったよ。だから・・・。」

「真紅??」

「おや、これは真紅さん。覚えていましたか。」

「うん。あの時あなたに、恭ちゃんの元に帰れって言われなかったら、あたしはまだ・・・。」

語尾が涙で聞き取れない。
そうだった・・・――――
真紅にとって、いや、悔しいけど僕にとっても恩があるんだ。

「・・・六道骸。真紅を助けてくれた恩は、いつか返す。この勝負一旦保留だ。」

「保留ですか・・・。いいでしょう。では僕はこれで。」

・・・ーーーーあいつ一体何しに出て来たんだ??

「恭ちゃん??どうしたの?」

「ん?何でもないよ。」

まさか・・・。

わざと姿を見せて、真紅の中から出て行ったのか・・・?

恭弥は漠然としないままだったが、六道骸に真紅が憑依されていた事が、一番ムカついていたのだ。

僕の真紅に。

今度は絶対咬み殺す。

「恭ちゃん?顔が恐いよ?」

「ん?そうかい?じゃあ真紅が慰めてよ・・・。」

そう言い終わらないうちに、恭弥は真紅の上に覆いかぶさっていた。

「恭ちゃん・・・?」

「真紅。僕だけのものだよ・・・。」

誰にも渡さない。僕だけの宝物。

「ん・・・はぅ・・・。」

恭弥の唇が、真紅の首筋を這う。

真紅の甘い吐息・・・。

「真紅。僕もう限界だよ。」

限界・・・??

「恭ちゃん?トイレ行ってくれば?」

恭弥は、がっくり肩を落として言った。

「真紅・・・。誰がトイレの話をしてるの?」

「えっ?違うの〜?」

本当は判っているのに、わざとはぐらかす様に言う真紅。

「僕が限界って言ったら、ひとつしかないだろ？」

「あれ～？何だっけ～？」

真紅はケラケラ笑いながら、面白がっている。

「そう。真紅は僕を愛してないんだね？」

はい？？

「何でそうなるの～？」

「僕の不幸を面白がってるじゃない。」

ありゃ・・・。

恭ちゃんがいじけちゃった。

「でも、恭ちゃんはあたしの言う事何でも聞いてくれるんだよね？確か？」

「・・・いつそんな約束をしたんだい？」

今度は恭弥が反撃に出た。

「あっそう。ふぅん。雲雀恭弥は約束は守るんじゃなかっ・・・・。」

言いかけた真紅の唇を強引に奪う。

「ん・・・ん・・・・。」

そのまま・・・ーーーーーーーー

・・・ーーーーーーそのままベッドに倒された。

「きょ・・だ・・め・・ぇ。」

「残念。僕が止めると思うのかい？」

パジャマしか身に着けていない真紅の、胸に恭弥の手が伸びる。

「あ・・・っっ。」

「ほら、もう感じてるくせに。僕に逆らうのかい？」

「ば・・かぁ・・。」

「ふぅん。そう。じゃ手加減してあげないよ？」

やだぁ・・・。

ここ個室でも病院だよ～。

「真紅。僕より先に六道骸と話したりして、悪い子だね。」

「それは・・・あっ・・・。」

恭弥の愛撫は止まらない。

「それは何だい？言ってごらん？」

責め続けながら、恭弥は真紅に語りかける。

「きょ・・ちゃ・・だめ・・。」

ふふっ、っと笑って恭弥は言う。

「ちゃんと答えないと判らないよ？真紅？」

「ばか・・・ぁ・・。」

次の瞬間、恭弥が入って来た。

「はっっ・・・・だめぇ・・・。」

真紅はそのまま達した。
が、恭弥は構わず動きを速める。

「あ・・・・っ。」

・・・ーーーーーー身体の力が抜けていく・・・。
真紅はそのまま昇り詰め、意識が飛んでしまった・・・。
恭弥もまた、真紅の中で実に2ヵ月振りに果てた。

「真紅？大丈夫かい？」

気だるく動けない身体をそのままに、真紅は恭弥に文句を言う。

「も～、恭ちゃん。ここ病院なのに信じられない～。」

「ふふっ、気絶する程感じてたんじゃないの？」

「ばっ・・・ばかぁ～。」

ようやく動ける様になった真紅に、恭弥がパジャマを着せる。

「僕だって限界だって、言っただろ？」

「へぇ～、じゃあ本当に浮気してないの？」

・・・はは。さぁね。

「しないって約束しただろ？」

・・・ばれなければね。

「あれ～？珍しいね？モテモテの恭ちゃんが。」

「・・・皮肉かい？」

「本当の事言っただけだよ～。」

ペロッと舌を出して真紅が言う。

「ふぅん。そんな事言うんだ、真紅は。」

・・・当たってるけどね。真実の雲雀恭弥を知らないのは、真紅、お前だけだよ。

そう。真実の雲雀恭弥を知らないのは、一番身近な真紅だった。
確かに恭弥が愛しているのは、真紅ただひとりだった。

が、漆黒の髪に漆黒の瞳。喧嘩で鍛えた肢体・・・。
そのまま歌舞伎町でＮＯ．１になれそうな容姿を持っている。

たとえそれが、不良の頂点に君臨しようとも、恭弥に告白する女子生徒は後を絶たなかった。

そして・・・。
告白されると、片っぱしから手をつける。
恭弥にとっては、相手の感情なんてどうでもいい事だった。
寄って来る者は全て獲物。あくまでも恭弥は遊び・・・のつもりだったのだが。
あの手紙の一件以来、すっかり真紅の信用を失くしていた。
恭弥にとって、最大の弱点は真紅だ。
そして・・・。
唯一恭弥に言いたい放題なのも真紅だけだ。

「恭ちゃん？」

「ん？なんだい？」

「そう言えば、あの・・・高橋さん？だっけ？」

また・・・そんな話を持ち出して。

「何？」

不機嫌に聞き返す。

「あの後どうなったのかなぁ～って。恭ちゃんの事だから、何かしたんじゃないの??」

「・・・何故そう思うんだい?」

「恭ちゃんあの人に口止めしたでしょ??」

・・・何故判った??

あの娘が真紅と話す時間なんて、なかった筈。

恭弥の顔色が変わった・・・――――――

「恭ちゃん??」

はっ!として我に返る。

・・・これは真紅の誘導尋問だ。

「何の事か判らないけど?」

「そうかなぁ～。」

「・・・真紅は何故そんなに僕を疑うんだい？」

「だって恭ちゃん・・・態度変だよ？」

明らかに動揺を隠しきれてない。
冷静な恭弥には、珍しい事だ。

当然真紅が、それに気付かない筈がない。

落ち着け！
僕は誰だ？雲雀恭弥だろ。

「真紅？その話はもう済んだだろう？僕は負けたんだ。」

「過去はもういいよ。あたしが聞きたいのはこれ。」

そう言って、一通の手紙を差し出した。

・・・ーーーーー恭弥の背筋が凍る。

「何だい？これ？」

出来るだけ平常心を装いながら、それを受取る。
それは・・・――――
恭弥の想像を遥かに上回る内容が綴られていた。
それは・・・。
多分恭弥に遊ばれた女の子が、自分の知っている限りの恭弥の姿を真紅に送りつけてきたのだ。書いてある事自体は・・・全て偽りはない。
しかし・・・。

「真紅？これ読んだの？」
「・・・読んだよ。」
完璧なまでに怒ってるな・・・。
当たり前か。
「恭ちゃんの正体って、それ？」
「僕の正体は真紅が一番よく知ってるだろう？」

話しながらも、必死に逃げ道を探す恭弥だが。

「恭ちゃん。今日は帰って！」

真紅の言葉には、有無を言わせぬ気迫がこもっていた。

「それは・・・出来ないよ。真紅をひとりには出来ない。」

「いいから帰ってよ！！」

参ったな・・・。

こんな状態の真紅をひとり置いて帰れる訳ないし。
真紅は頭に血が上っちゃってるし。
少し様子を見るか・・・。
それと、この後片付けがあるな。
手にした手紙の送り主を探すか・・・。

「判った。帰るよ。」

恭弥は病室から出て行った。
…ーーーーー病院の屋上。
恭弥は携帯を取り出し、電話を掛ける。短い伝言。

・・・いつもの事だ。
僕の前に立つ者は全て咬み殺す。
・・・今回の獲物は手加減出来ないな。
何故真紅に嫌がらせをする??
真紅は今入院中の身だ。
やっと退院出来そうなのに、あの様子じゃまた伸びそうだ。

『ヒバリ』

「ヒバード。何か判ったかい?」

ヒバードは一枚の写真を恭弥に渡した。

「・・・これか。」

恭弥は屋上から飛び降りた。
腕に愛用のトンファーを仕込んで・・・。
その口元には、楽しげな笑みが零れていた。

「最近身体が鈍っていたからね。楽しませて貰うよ。」

恭弥はとある場所に向かって行った。
これから始まる血祭りに胸躍らせて・・・ーーーーーーー
恭弥は愉しげに、目的地まで走った。
そこは人気のない、林の中。
首謀者は既に委員会の手によって、取り押えられている。
当然女だろうと考えていたら、捕まっているのは・・・男達??
真紅関係だろうか?
だとしたら、生かしておく訳にはいかない。

「委員長。申しつけ通りに。」

「御苦労。」

ゆっくり歩み寄る恭弥。

「君達。真紅が狙いかい?」

その手には銀色に光るトンファー・・・ーーーーー

そして・・・。

血塗れになって倒れて行く男が数人。

「・・・準備運動にもならないな。」

恭弥は、倒れている男の髪の毛を鷲掴みにして、顔を上げさせた。

「・・・全部話さないと、死ぬよ？」

・・・その男の顔は恐怖に引き攣っていた。

構わず恭弥は聞く。

「何が目的だい？」

「・・・た・・・頼まれたんだ。」

「誰に？」

「・・・名前は聞いてない。女だ。」

「そう。」

それだけ言うと、その男目がけてトンファーを振り下ろした。

「真紅に近付いたら、咬み殺す。」

・・・やれやれ。
これじゃ何も判らない。

「草壁。引き続き調べてくれ。」

「はい。委員長。」

「それと、この後始末を頼む。僕は病院に戻る。」

真紅をひとりにしておくのは、危険だ。
敵の姿がまだ、見えない。
恭弥は急いで病院に戻って行った。

・・・女か。
心当たりが多すぎるな。

・・・ーーーーまだ真紅は怒ってるだろうな。
真紅の好きな苺のケーキを買っていこう。

恭弥が病室に入ると、真紅は眠っていた。
・・・少しホッとして、真紅の傍に座る。
まだあどけない寝顔。
恭弥は時間を忘れて見つめていた。
ふと、真紅が気配で目を覚ました。

「ん・・・？恭ちゃん・・・？」

「よく眠れたかい？」

「・・・嫌な夢見た。恭ちゃんが知らない女の子と一緒にいた。」

ぐっ・・・ーーーー

「そ、そうかい？夢だろ？ほら、真紅の好きなケーキ買って来たよ。」

「恭ちゃん。ケーキであたしの事誤魔化そうとしてる。」

うっっ・・・。
いちいち言葉が突き刺さる。

「それより何でまた戻って来たの？彼女に会いに行ったんじゃないの？」

・・・ーーーーカッチーン！！

「そう。真紅は僕に他に彼女を作れ・・・そう言うんだね？」

「そんな事・・・言ってないもん・・・。」

また泣く・・・。
僕が真紅の涙に弱い事知ってて泣くんだから。
狡いよ・・・。

「ねえ・・・真紅。泣かないでよ。全部僕が悪いよ。だから機嫌直してよ・・・。」

「・・・・・・・・。」

声を殺してすすり泣く真紅。
参ったな。

「恭・・・ちゃん・・・・。」

「ん？何？」

「顔・・・血がついてるよ。」

そう言って、真紅は堪え切れずに笑いだした。

え・・・・・？？

「また喧嘩したの～？」

はい？？
今泣いてたんじゃ・・・？？

「ちょっとね。運動にもならなかったけど。真紅今泣いてたんじゃ・・・。」

「誰が～？？ねぇ恭ちゃん、ケーキ頂戴。苺ショート。」

・・・何でそうなるんだ？？

「・・・待ってて。」

また騙されたな。
この雲雀恭弥を手玉に取れるのは、やっぱり真紅、お前だけだよ。
真紅にケーキを渡しながら苦笑していた。

「きゃぁ～。久し振り～。」

「・・・ご機嫌は直ったのかな？お姫様？」

恐る恐る聞いてみる。

「何が～？」

・・・喧嘩より疲れるな。

「また僕を騙したんだね。真紅？」

「騙されたのは恭ちゃんじゃない？あたし何も言ってないよ？」

はいはい。そうですか。
もういいよ。何でも。

「恭ちゃん。あの手紙どうなったの？喧嘩はそれでしょ？」

「・・・まぁね。ただ、まだ判らないんだ。でも手紙を送ったのは男だったよ。真紅？」

「・・・男？？」

「真紅は僕に隠してる事はないかい？」

「・・・さぁ？？ないと思うけど？？」

「最近誰かに告白されなかったかい？」

「恭ちゃん。あたしずっと眠ってたんだよ？」

そうだな・・・。

それに事故の後真紅がひとりになる事はなかった。

僕の目の前で真紅に告白する命知らずはいない筈。

それじゃあやっぱり僕の関係か・・・。

遊んだ女なんかひとりも覚えてないしな。

調べは委員会に任せるか・・・。

その時。

恭弥の携帯が鳴った・・・ーーーーーーー

「ごめん。ちょっと・・・。」

恭弥は携帯を手に病室から出る。

「・・・？？あっそうか。病院は携帯禁止だっけ。」

恭弥の態度を不審に思った真紅だが・・・。

恭弥はそのまま屋上へ上って行った。

「もしもし。」

「草壁です。」

「何か判った？」

「はい。やはり委員長のお考え通りでした。」

「そう。僕が出るまでもないな。君に任せるよ。」

「はい。承知いたしました。」

これで後片付けは済んだかな・・・。

ふっ・・・。

僕がそんな事で、どうにか出来るとでも思ったのかな。

甘いな。

恭弥は笑っていた。

とても冷たく凍りつくような微笑だった。

・・・ーーーーー屋上からゆっくり降りて行く。

「恭ちゃん？電話草壁でしょ？何かあったの？」

病室に戻った恭弥に、真紅が聞く。
どうして真紅には全部判るんだろう??
・・・本当に遊びは控えた方がいいな。

「委員会の事でね。」

「・・・忙しいんなら、行ってもいいよ?恭ちゃん。」

「電話で済ませたから大丈夫だよ。」

「そう・・・。」

浮かない様子の真紅に、恭弥が聞く。

「どうかしたの?」

「何でもないよ・・・。恭ちゃんは、あたしには何にも教えてくれないんだな・・・って。」

また雲行きが怪しくなって来たな。
本当の事は言えないしね・・・。

「僕は何も隠してないよ。真紅は何が知りたいんだい？」

「・・・知りたい事が多すぎて判んない。」

・・・ーーー真紅・・・。
また無理を言うな・・・。
その時、部屋のドアをノックする音が響いた。

「どうぞ。」

入って来たのは、院長。

「雲雀様、神崎様の退院の日が決まりました。」

「そう。で、いつなの？」

「明後日には。」

明後日か――――――

「そう。院長、世話になったね。」

「いえ、お元気になられて良かったですね。」

そう言いながら、真紅に問いかける。

「体調の方は、いかがですか？」

「・・・心が痛い。」

ぶっ・・・――――

「えっ？？」

「い、いや。何でもないんだ。会計は僕に回しておいて。」

「はい。それでは失礼します。」

やれやれ。
やっと退院か。
とにかく良かったな。
真紅の機嫌の悪さを除けば・・・だけど。

真紅の退院の日。
朝からよく晴れていた。

「支度は出来たのかい？」

「うん。荷物はそこに置いてあるよ。」

恭弥が荷物を運ぶ。

「・・・帰ろうか？」

「うん。あ～、やっと自由だぁ～。」

「・・・長かったね。」

車を走らせながら、恭弥が言う。

「恭ちゃんは、あたしが退院しない方が自由なんじゃないの～？」

「真紅。いい加減にしないと、僕も怒るよ。」

むぅ～・・・ーーーー

本当の事言っただけなのに～。

真紅の家の前で、荷物を運んでいたその時。

「ランボ。やめろって。危ない・・・。あ～っっ、神崎さん??よけて・・・。」

「え・・・。」

ツナの叫び声に振り返った真紅だが。

ランボの打った１０年バズーカが真紅に・・・ーーーーー

真紅は１０年後に飛ばされていった・・・。

「真紅。」

「ヒ、ヒバリさん。俺・・・ごめんなさい。」

「また君か。沢田綱吉。真紅はどうなったんだい？」

「１０年後に・・・行っちゃいました・・・。あれ？でも変だな？？」

入れ替わっている筈の１０年後の真紅がそこにはいない。
何故・・・？？？

ここは・・・？？
何処？？？

広い和室。
知らない・・・部屋。
真紅はその、障子で仕切られた部屋の布団にいた。

「ここ何処～？？恭ちゃ～ん？？」

その声に、慌てた様子で近付いて来る足音が、ふたつ。

「・・・真紅？？」

「真紅さん・・・？？その姿は・・・？」

へっ・・・・??
誰・・・・??

「恭・・・ちゃん??・・・と草壁??」

あれぇ〜??
何だか恭ちゃん大人っぽくなった気がするけど??
・・・いきなり恭弥に抱きしめられた。

「真紅、やっぱり10年前から来たんだね。」

はい??
10年前・・・??

「あの恭ちゃん?あたしさっぱり判んないけど?恭ちゃん老けてない?」

「真紅は16才のままだけど、僕達は10年の年月が流れてるんだよ。それに・・・。」

恭弥が言葉に詰まる。

「・・・君は死んだんだ。」

死んだ??

誰が??

「恭ちゃん??言ってる意味が判んない。」

「・・・ごめん。嬉しくて・・・真紅の声がまた聞けるなんて。」

大袈裟だなぁ。

「恭ちゃん?あたしはいつも恭ちゃんと一緒にいるのに?」

「・・・この世界に君はいないんだよ。真紅。」

え・・・。

「何で〜??あたし此処にいるよ?それよりここ何処〜?」

「此処は僕の作った地下組織。この組織の存在は、草壁と、一部のボンゴレ守護者しか知らない。」

???さっぱり意味不明なんだけど・・・???

「あたし死んじゃったって、本当?」

「僕が真紅の異変に気付いた時には、既に・・・手遅れで・・・。」

手遅れ・・・?

病気??

「恭ちゃん?あたし病気だったの?」

「・・・白血病・・・だったんだ。」

白血病・・・。

ママと同じ病気??

そんな・・・ーーーーーーー

「あぁ、でも君が過去から来てくれれば、未来は変えられるんだよ。」

「・・・何で？」

「今の真紅はまだ、病気は発症していないんだ。この時代には、白血病の薬も開発された。」

ママ・・・ーーーー
抗癌剤の副作用に耐え続けていたその姿。
髪の毛は全部抜け落ちて・・・。
いつも輸血の繰り返しだった。
日毎に痩せ小さくなってゆくその姿は、ママの命そのものだったね・・・ーーーー

「このまま過去には戻らないで、僕の傍にいて未来を変えてよ。真紅。」

「・・・でもそしたら、過去にあたしはいなくなちゃったんでしょ？」

「そうだったね。あの時はびっくりして、沢田綱吉を咬み殺したけど。」

・・・あたしがいなくなった世界で、恭ちゃんはどうしてたんだろ・・・？

「恭ちゃん、あたしがいなくなっても平気だったの？」

「最初はびっくりしたよ。夢中で探したんだよ。」

・・・へぇ？？

「でもある日ひょっこり戻って来たんだ。３ヵ月くらい過ぎた頃にね。」

「じゃぁ・・・３ヵ月ここにいるの？？」

「真紅。全ては君と僕、そして・・・おいで？」

恭弥が誰かを呼んだ。
それは・・・ーーーーーー

「おいで・・・ーーーーーー。」

優しく恭弥が呼ぶその先にいたのは・・・??
小さな男の子。
恭弥に生き写しなその子。まさか・・・??

「恭ちゃん・・・その子・・・。」

「真紅。君の子だよ。恭伽。君がつけた名前だよ。」
あたしの子・・・ーーーーー

「それじゃ、あたしは・・・恭ちゃんと・・・?」

「うん。恭伽、ママだよ?」

いや・・・。
まだ産んでないし。

いきなり『ママ』とか言われても・・・。

「ま・・ま??」

その子は、小さく消えてしまいそうな声で真紅を呼んだ。
その声を聞いた時・・・。

「・・・おいで??」

真紅が呼ぶと、恭伽は嬉しそうに駆け寄って来た。

・・・その小さな、温かい身体を真紅は抱きしめた。

「恭伽。ママに抱いて貰えてよかったね。」

「ん・・・。パパ?」

ぶっ・・・。

恭ちゃんがパパ〜??

恭ちゃんに一番似合わない呼び名だよ。それ。

堪え切れずに笑いだした真紅。

「真紅?君が何を笑っているのかぐらい、判るよ?」

「だって・・・一番似合わない・・・ーーーー」

真紅は、笑いが止まらない。

恭弥はさすがにムッっとして来た。

「真紅。ここでは僕の妻だからね?覚えておくんだね。」

はい??
冗談でしょ〜??

「僕は今、大事な仕事を抱えて忙しい。恭伽を頼むよ。」

「えっ??」

へっ??
何それ??

「恭ちゃん?あたしひとりでこの子の面倒見るの〜?」

「当たり前でしょう。真紅は母親なんだから。」

いや・・・だから・・・産んでないし。
あたしまだ16才だし。

「とにかく、恭伽も真紅をママだと感じてる様だし、僕は忙しいから。」

えぇぇぇ～！！！

「ちょ・・・恭ちゃん。本気なの??」

「僕は嘘はつかないよ?」

・・・嘘だらけじゃん。

「じゃぁ、何の仕事してるのかぐらい、教えてよ?」

「極秘任務。」

何じゃ??それ??

答えにすらなってないよ～。

「あ！それと、ここから絶対に出ちゃ駄目だよ。」

また訳判んない事言ってるよ・・・。

「何で??」

「地上は敵だらけだからね。」

敵・・・？？？
誰の敵？？？
恭ちゃんには敵だらけじゃない。
今更何を言ってるの？？

「恭ちゃん？敵って女？？」「真紅。いいかい？此処は君がいた時代より１０年未来なんだ。敵はマフィアなんだよ。」

は・・・ーーーーー？？？
マフィア？？？
マフィンなら知ってるけど・・・。

「恭ちゃん？マフィアって、何？」

「判り易く言うと、外国のヤクザってところかな。」

恭ちゃん・・・。何を敵に回したの？？

「奴等がこのアジトを捜している。真紅は絶対に出ちゃ駄目だ。殺されるよ。」

「えぇぇ～？？何それ～？あたし元の時代に帰りたいよ～。」

「病気が治るまでは、我慢してよ。でないとこの時代に君が存在しなくなるんだ。」

そうだった・・・。

「恭ちゃん。あたし幾つで死んじゃったの？」

「・・・25だよ。恭伽を産んだら死ぬって言われて、それでも僕の反対を押し切って、真紅は命がけで恭伽を産んだんだ・・・。」

25・・・。

あと9年しか生きられないんだ。

このまま帰ったら・・・ーーーーーーー

恭ちゃんと別れるなんて、絶対に、やだ。

「判った。恭ちゃんの言う通りにする。」「恭ちゃん？それであたしはどうすればいいの？」

「・・・取り合えず病気の発症を抑える治療。それから・・・。」

恭弥の顔が近付いて来る・・・ーーーーー

「きょ・・・ちゃ・・・。」

真紅の唇に触れる恭弥のそれ・・・。

真紅にはいつもの事だが、恭弥には真紅を亡くしてから、1年の月日が流れていた。

「・・・懐かしいよ。真紅の全てが。」

・・・あたしは複雑過ぎて、何が何だか判んないよ・・・。

しかも。

大人の恭ちゃん。

渋い！！

「恭さん。そろそろ・・・。」

不意に言葉をかけてきたのは・・・草壁。

「草壁。変わんないね～。老けたけど。」

「真紅さんも、懐かしいお姿で。お元気で何よりです。」

・・・そういや未来のあたしって、やっぱり美人かなぁ??
恭ちゃんの奥さんになるくらいだから、物凄い美人なんだなぁ。

「恭ちゃん?あたしの写真、ないの??」「写真か・・・。ごめん。ないんだ。」

「えっ??」

「真紅が死んだ時・・・辛くてね・・・全部燃やした。」

そんなに・・・??
恭ちゃんがあたしを愛してくれたの・・・?

「ママ〜。」

ぅおっっ!!
完璧にママだよ〜・・・。

「恭伽、今日からママと一緒だよ。」

恭弥は、真紅に抱きついて離れない恭伽に優しく言った。

「恭ちゃん？あたし子供の面倒見た事ないよ？」

「大丈夫だよ。未来の真紅だって、恭伽とは1年しか一緒に過ごせなかったんだからね。」

そうか・・・ーーーーー

「それじゃ、恭伽はあたしの事は覚えてないんだ。」

「うん。まだ1歳にならないうちに、君は僕達を置いて逝ってしまったからね。」

ごめんね・・・。
淋しい想いをさせて・・・。
真紅は腕の中の小さな恭伽を、ぎゅっと抱き締めた。

「さて、真紅。僕はこれから出かけなきゃならない。その前に君の事を知らせておかなければならない人物が、いる。」会わせたい人・・・？？

誰～？？
まさかその・・・マフィアとかじゃないよね～。

「恭ちゃん？誰に会うの？？」

「・・・ついて来て。」

・・・長い廊下。
しかも和風だし。
ここ本当に地下なの？？

・・・その先にエレベーターの様な扉。
恭弥はカードを差し込んで開錠した。

・・・ーーーーーー眩しい光。

「これは雲雀様。お待ちしておりました。」

誰？？
不思議の国のアリスに出てくる「「ハンプティ・ダンプティ」」みたいな人だけど？？

「真紅。彼はね、優秀なエンジニア件医者なんだよ。」

優秀・・・？？？
恭ちゃんが誰かを褒めるのって、珍しい。
でも・・・？？？

本当に優秀なのかなぁ??
・・・人を見かけで判断しちゃいけないか。
きっと物凄い人なんだよ。

「・・・彼の名はジャンニーニ。君の主治医だよ。」この人がお医者様〜???・・・なるほど。人は見かけじゃないんだなぁ。

「ジャンニーニ。過去から来た真紅だ。これで病気は治るんだろうね?」

「これは可愛らしいお嬢様で。・・・もちろんですとも。この私に不可能はございません。」

・・・きっぱり言い切ったよ。

「それでは、先ず全身の検査からやらせて頂きますが・・・。雲雀様、よろしいでしょうか?」

「君に任せるよ。」

「かしこまりました。それでは、明日より検査に入ります。」

検査って???

何するんだろ??
長い廊下を戻りながら、恭弥が言う。

「真紅、僕はこれから出かけて来るよ。いいかい?絶対に外に出ちゃ駄目だよ。」

「うん。判ったよ。」

「いい子だ。真紅。」

・・・何となく子供扱いされてない??
そりゃ今の恭ちゃんから見れば、あたしは子供なんだろうけど・・・。

「真紅?何ひとりで百面相してるの?」

「ひゃ・・・百面相って、酷いよ~恭ちゃん。」

くす・・・ーーーーー
真紅のそんな顔、忘れていたよ・・・。

「真紅?帰って来たら僕の頼み、聞いてくれるかい?」

「なあに??」

「・・・真紅にしか出来ない事だよ。」

「ふぅん??何だろ〜??」

「・・・帰って来たら判るよ。じゃ、恭伽を頼んだよ。」

そっと唇に触れるだけのキス・・・ーーーーーー

そのまま恭弥は、踵を返して出て行く。

「恭ちゃん・・・。大人だなぁ。」

真紅は変な所で感心していた。

「あ!でもこれって、浮気じゃないよね??」

「ママぁ〜。」

ぅおっとぉ〜!!

忘れてたよ。
ここではあたしはママなんだっけ。

「恭伽？ママとご飯食べよう？」

「うん。」

可愛いなぁ～・・・ーーーーーー恭ちゃんのミニチュアみたいだよ。
そっくりで。

「恭伽は何が好きかな？？」

何が好き・・・ーーーーーー？

「ハンバーグ。」

どひゃ～？？
好みも一緒かい？？
しかもあたし作れないし。

「パパのハンバーグね～。おいしいんだよ、ママ。」

はい？？？

「恭伽？パパが作るの？」

「うん。」

・・・何処の雲雀恭弥だ？？そりゃ？？

恭伽を抱いて、キッチンに向かう真紅。

そこには・・・ーーーーーーーー

エプロン姿の草壁が立っていた。

「真紅さん、食事の支度出来ました。」

草壁・・・。

あんたも恭ちゃんの部下で、苦労してんだろうね・・・。

「草壁～。その格好やめろ～。」

でも、許せん。

目が汚れる。

「は・・・？どうかしましたか？」

「だからエプロン外せってば～。」

恭伽はその成り行きを、呆然として眺めていた・・・。

「は・・・??どうかしましたか??」

「気色悪いからエプロン止めろってば～。」

「ママぁ～?」

「あぁ。ごめんね、恭伽。びっくりしたよね?草壁のエプロン姿。」

真紅さん・・・。

そこまで言うなんて・・・。酷い。

「恭伽、ご飯食べようね。」

「うん。ママと一緒?」

「そうだよ。草壁の手料理ってのが、引っかかるけど。」

「あの・・・。真紅さん、言葉に棘があるように思えるんですが・・・。」

「そうだっけ??気のせいじゃないの?」

そう言えば１０年前の真紅さんは、こんな人だった。あの、恭さんに反論出来る唯一人の人。

・・・忘れてました。

「草壁〜。美味しいじゃない??」

「・・・お口に合ってよかったです。」

真紅が恭伽に食べさせるその姿を・・・ーーーーーーー

真紅と恭伽が食事をしている姿を、満足げに見ていたのは・・・??

「パパぁ〜。」

「恭ちゃん??」

「ただいま。真紅、恭伽、ママといられていいね？」

「うん。」

「恭ちゃん？早かったね～。もう用は済んだの？？」

「済んだよ。今日はね、早く帰りたかったんだ。」

ふぅ～ん？？

・・・何だか恭ちゃん少し疲れてる様に見えるけど・・・？

「・・・僕だって君と一緒にいたいんだよ。」

それがいまいちピンと来ないんだよ～。

だってあたしは毎日恭ちゃんと一緒にいた訳だし？？

いきなり「「ママ」」とか「「妻」」とか？？

世界変わりすぎだし？？

「・・・真紅？帰って来たら僕の頼み、聞いてくれる約束覚えてる？」

「うん。覚えてるよ？なあに？」

「・・・夜になってからね。」

真紅の耳元で囁いて・・・。
意味深に微笑む恭弥。

「夜??」

「僕も食べようかな。」

はぐらかす様に恭弥は言った。
「草壁。例の物、手に入った。後を頼むよ。」

「判りました。恭さん。それでは私はこれで失礼します。」

「草壁〜。そのエプロンは犯罪だろ〜。」

「真紅・・・。何を言ってるの?」

恭弥が呆れた様に、真紅に聞く。

「だって、恭ちゃん。気持ち悪いじゃん。」

恭弥は恭伽に食べさせながら、笑っていた。

へぇ・・・??

怒んないんだ~。

やっぱり大人になったんだなぁ。恭ちゃんって。

「じゃあ、明日からは真紅が作ってくれるの?」

うっっ・・・ーーーーーーー

それイジメですか??

「・・・恭ちゃん。あたしが何にも出来ないの、知っててて言うんだ?」

くす・・・ーーーーーー

恭弥の顔が近付く・・・。

「ん・・・。」

今までのキスと違う・・・?

「真紅・・・、恭伽が眠ったら抱いてもいい？」
抱いていい・・・ーーーーーー？
「へっ？？」
何言ってんの？今まで一度だってそんな事、聞いた事ないよ。
「恭ちゃん？今までそんな事聞いた事なかったよ？？」
「そうだっけ？若かったんだなぁ。」
・・・何気にジジ臭いよ。恭ちゃん。
「で？いいの？」
「やだって言ったら、しないの～？」
「・・・多分する。」
「じゃ、返事聞く必要ないじゃん。」

「そうだね。」

う～ん？？
何か調子が狂うなぁ・・・。
恭ちゃんが素直ってのが、一番恐いわ。

「恭伽、パパとお風呂入ろうね。」

ぶっ・・・ーーーーー
堪らず噴き出した真紅。

「まだ笑ってるのかい？真紅。」

かなり不機嫌に言った。

「・・・いえ、何でもありませんわ。旦那様。」

「ワォ！いいねその呼び方。」

・・・喜んでるよ。
いつもの恭ちゃんだったら、怒るのに。
１０年の歳月は，恭ちゃんも変えるんだ・・・。凄いかも。

「真紅も一緒に入ろうか？」

「ママと入る～。」

「ほら、恭伽も入りたいって。おいで？」

「やだぁ～。あたしまだ恭ちゃんとお風呂入った事ないもん。」

「じゃあ初体験だね。」

あの～？？

一緒に入る方向に話が向いてますけど・・・。

「ママ～。お風呂入ろう？」

うわ～・・・。

弱いんだなぁ～。

恭伽に言われちゃ、断れないよ～。

「よし！恭伽、ママとお風呂入ろうね？パパはいいよね？」

「ふぅん。そんな事言っていいのかな？後で泣くよ？」
「え？？何その意味深発言は？？」

「・・・別に。僕はただ思ったままを言っただけだよ。」

・・・やっぱり中身は変わってないじゃんか～。

「もう、いいよ。恭ちゃんも一緒に入れば？」

「そうするよ。」

にっこり微笑んで、恭弥が答えた。

・・・ーーーーーー明るい浴室。
照らし出された真紅の裸体を、恭弥は複雑な思いで見ていた。
過去を変えれば、未来は変えられる。

・・・そうすればここにいるのは、２６才の真紅なんだ。

「真紅、明日から検査だね。」

「うん・・・。何の検査だろ？ちょっと怖いな・・・。」

「僕も一緒についてるからね。大丈夫だよ。」

恭ちゃん。傍にいてくれるんだ。
・・・よかった。
やっぱり少し優しくなったかな？

「恭伽？もう寝る時間だよ。」

その言葉に、忘れていた約束を思い出した・・・ーーーーーー
今夜あたしは・・・。

「真紅？どうしたの？寝室においで。」

・・・ーーーーードキッ！！
・・・ーーーーーこれって、浮気じゃないよね？？
物凄く複雑なんだけど・・・。
状況が。
でも、過去の恭ちゃんだったら、未来の自分にでも怒りそうだなぁ。

「恭伽が呼んでるよ。ママと寝るんだって。」

「そっかぁ。恭伽一緒に寝ようね？」

「ママと一緒・・・。」

そう言って真紅に抱きついたまま恭伽は眠りに落ちた。
可愛いな・・・。
やっぱり病気は、治さなくちゃね。

「真紅・・・。」

和服姿の恭弥が、目前に迫っていた。

「きょう・・・ちゃん。」

見つめ合いそのまま唇を合わせる。
触れるだけのキスじゃない・・・。
互いの舌を絡め合っていく。

「ん・・・ふ・・・。」

そのまま恭弥のキスは、真紅の耳から首筋に移ってゆく。

「ぁぁ・・・。」

切ない声が抑えきれない。

「真紅・・・。会いたかった。もう一度その声が聞きたかった。」

「きょう・・・ちゃ・・。」

・・・やっぱり大人の恭ちゃん。何処か、違う。

恭弥の欲望の波に翻弄されながらも、真紅は感じていた。

「ぁっ・・・っっ。」

恭弥の舌は、真紅の一番敏感な所を探り当てた。

「気持ちいいだろう?真紅?」

「はっ・・・っ。」

執拗に責められて、気が遠くなる・・・。

そのまま恭弥が入って来るのを感じた時。

「やっ・・・だ・・めぇ・・。」

一気に昇りつめてしまった。
そのまま全身から力が抜けてゆく・・・ーーーーー
恭弥にしがみついていた真紅の腕が、力なく落ちる。

「変わらないね。真紅。」

「何が・・・？」

擦れた声で聞き返す。

「さぁね。」

微笑んで、答えをはぐらかす。

「・・・ねぇ恭ちゃん？」

「何だい？」

「あたし過去に戻ったら、恭ちゃんに怒られないかなぁ？」

くす・・・ーーーーーー

「あ～。笑ったぁ～。」

「大丈夫だよ。僕が過去の僕に手紙を書くよ。」

ふぅ～ん・・・。

恭ちゃんが、あたしの話を信じるとは思わないけど、自分の話なら、
例え未来からの自分の手紙でも信じるか。
恭ちゃんは、いつでも自分しか信じなかったもんね。
でも・・・？
あたしの事は・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1625q/

雲雀と真紅

2011年1月19日04時30分発行